

池袋北口中華街構想をめぐる関係者の証言

— 国際開発の視点から —

符 啓 帆

はじめに

1980年代以来、ますます多くの中国人が日本への移住を選択している。2007年、中国は韓国を抜いて、日本への移民の最大の送出国となった。法務省のデータによると、2019年6月の時点で、日本に住んでいる中国系の人口（台湾、中国を含む）は約102万人に達した。主に日本の3大都市圏に集中しており、東京を中心とした大都市圏に半数以上が集中している。代表的なエリアは横浜、神戸、長崎、そして東京豊島区の池袋である。

しかし、日本の伝統的な3つの主要なチャイナタウンとは異なり、池袋チャイナタウンは新しいタイプの中国人によって形成され、継続的な発展の勢いを見せている。2008年、池袋の「東京チャイナタウン」で商売を営む中国人グループが、池袋エリアを神戸や横浜に似た「東京チャイナタウン」に変えたいと願って行動を起こした。

2008年、東京チャイナタウン準備委員会は、近隣に点在する中国人事業者の店舗を統合し、池袋を中心とした「ネットワークチャイナタウン」を形成し、その周辺にビジネスを展開することを目的としてその構想を発表した。また、中国と海外の中国人実業家の団結を促進し、地域の社会経済開発を促進し、経済効果を生み出

す規模を形成したいとした。この構想は地元の商工会との事前協議なく進められたため、右翼団体からの反対にあい実現することはなかった。

日本中華街の研究は主に以下の特徴がある：(1) 伝統中華街を主とし、その経済、文化及び生活などの面を分析し、東京中華街の研究は相対的に少なく、その阻害の原因分析に集中している。池袋地区に新たに形成された華人コミュニティに対する研究は少ない。(2) 有識者山下清海氏の著作は主に世界各地で新華僑華人が集まることによって形成された新しい華人コミュニティについて研究を行い、もちろん日本東京で新たに形成された華人コミュニティも含まれているが、主に華僑華人が集まる原因、現地社会との矛盾から分析している。しかし、これらの学者は地理的限界を突破し、「ネット型」と定められた東京中華街が現地社会とどのように交流し融合するかについての研究をあまり行っていない。

この論文は2008年の反省に立ち同構想を実現させるための方策を探るものである。

1. 中華街の比較

日本の3大中華街（横浜中華街、神戸南京町、長崎新地中華街）は、いずれも幕末の開港都市に形成された伝統的なチャイナタウンと位置づけられる。3大中華街は、主として日本人を対

象に、中国料理店を中核としながら観光地として発展してきた。これに対して、1980年代以降、華人ニューカマーズの増加に伴い、東京・池袋駅北口周辺に新興のチャイナタウンが形成されつつある。このチャイナタウンは、主とし

て華人ニューカマーズを対象にサービスを提供する中国料理店、食材店、書店、ネットカフェなどが集積して形成された点に大きな特色がある^(注1)。

表 1-1 新旧中華街比較表

	横浜中華街	神戸南京町中華街	長崎新地中華街	池袋
歴史	1859 (161 年)	1868 (148 年)	江戸時代中期	1980s
華僑華人 人数	6,000 人 ^(注2) 同区で登録されている外国人の約 4 割に当たる	13,634 人	1,143 人	14,250 人 区内在留外国人のうち 5 割弱を占める
出身地	広東 台湾	台湾 広東	福建省	東北地方
振興組織	1993 年 横浜中華「街づくり」団体連合協議会 (横浜中華街発展会協同組合)	1977 年 南京町商店街振興組合	1986 年 商店街の振興組合	2008 年 東京中華街促進会
計画	1978 年 再開発計画図 (中華街南門通り商業機能開発調査報告書 ^(注3)) 2006 年 横浜中華街まちづくり協定 ^(注4)	1981 年 南京町復興環境整備事業計画		「2008 年 東京中華街」構想
観光 スポット	1989～1995 年 中国式楼門 1990 年 関帝廟 横浜媽祖廟	1981 (昭和 56) 年 街路灯, 南京町広場と「あずまや」, 「長安門」, 「西安門」, 「海榮門」楼門 1987 年 中国風電話ポスト 1988 年 中国獅子像 1989 年 十二支石像 1993 年には「龍殿」	1986 年 中華門 (牌楼) 東門: 「青龍」 西門: 「白虎」 南門: 「朱雀」 北門: 「玄武」	なし
代表性	アジア最大	「南京町」は、今では神戸だけでこの名称が残る	三大中華街のなかでも、もっとも歴史が古い	
教育	横浜山手中華学校 (中華人民共和国系) 横浜中華学院 (中華民国系)	神戸中華同文学校	1988 年 長崎中学校の閉校	周辺日本語学校
協力関係	華僑社会の分裂から協調へ。分裂していた横浜中華街の華僑社会は、関帝廟の再建に向けて、大陸系と台湾系の政治的対立を克服し、両者が関帝廟再建委員会を設立した。	阪神・淡路大震災においても被害を受けたが、現在のように一般観光客が多数押し寄せるようになったのは震災が契機である。震災後ライフラインが停止し厨房も被災した中で、レストランの営業ができなくなった一部の店は、やむを得ず店頭での点心などの軽食テイクアウト販売を、プロパンガスとポリタンクの水を使って再開した。これが観光客にとって気軽に食べ歩きができるとして好評を博し、震災から完全に復興した後も継続されて、現在でも南京町の名物となっている。		2008 年、華人側は新しい観光スポットにしようと提案したが、古くから続く地元商店街からは「商店街の活性化にならない」と反発が起き、構想は頓挫。

池袋中華街の特に新しい点

歴史的、文化的背景や国際環境の変化などで新旧中華街には違いがある。しかし、池袋中華街の建設にあたっては、伝統的な中華街の地域社会や地元の人たちとの付き合い方が参考になる。上記（表1-1）に示すように、池袋中華街の地域社会との交流や融合には、次のような新しい特徴がある。

第1に、伝統的な中華街は旧華僑・華人が中心で、池袋中華街は高学歴、ハイテクの技能を有する新華僑華人が、さまざまな場所から来ている。3大伝統中華街の華僑華人たちは当時、「生計を立てる」ために集まっていた。また、地理的な理由から、福建省、広東省、海南省などの南部沿海地域や台湾地域のような中国南部沿海地域から来ていた。1964年の東京オリンピックの時には、日本には4万8,000人の中国人がいたが、そのうち49.3%が台湾出身、12.4%が福建出身、11%が広東出身であった。逆に池袋に住む東京圏の新華僑・華人の多くは留学や仕事などを目的として来日し、全国各地、特に上海、福建、東北部三省から集まってきている。2009年には、東北部三省出身者が全体の34.9%を占めた^(注5)。

第2に、池袋の中華街は3大伝統中華街のように中国の象徴的な建物と伝統がある中華街の牌楼を立てることを目指すのではなく、日本の同業者とネットワーク型で競争することを目指すコンセプトの中華街である。建築物に中国の要素は見当たらないが、中華文化の精神の核は変わらず、「文化的紐帯」と「社会空間」を通じて池袋を中心とした周辺の華人の店舗を結びつけている。また、池袋地区の華僑華人の業態は多種多様で、物産店、華文新聞、華文学校、旅行会社など、伝統的なビジネスにとどまらず、新華僑華人は日本社会の各分野で活躍している。

最後に、横浜、神戸、長崎の3大中華街は、

基本的に廃墟または未開地に形成されたもので、華僑華人がその土地で経済発展の最初の礎を築き、開拓者となり、現地の日本人とともに中華街を築いてきた。池袋の新華僑華人が「後来者」となるのは、基本的には1980年代以降、留学や仕事などで東京の池袋に集まるようになってからで、言い換えれば、現地の日本人が東京の池袋で「先住者観」を形成した後からである。そのため、「後来者」である新華僑華人がいかに現地社会と交流し、互いの理解と信頼を深めていくかが、東京中華街構築の主要な課題となっている。華僑華人の経済活動が東京特に池袋の繁栄を導くためには、コミュニケーションと信頼を醸成し地元社会に存在する心理的な警戒感、抵抗感、さらには拒否感を打ち消すことが求められる^(注6)。この欠落に気づき行動を起こすことは、池袋という新中華街が伝統の3大中華街から学ぶべきことでもある。

2. 関係者へのインタビューとその結果

池袋中華街構想の研究が進むにつれ、池袋中華街にまつわる日中双方の本音が気になってきた。中国側は池袋で「東京中華街構想」が打ち出されてから十数年、果たしてそれを放棄したのか？ それともあきらめずに努力を続けているのか？ 日本側も今の池袋「東京中華街」をどう見ているのだろうか。彼らは今この見方を変えているのだろうか？ 以下は私が日中双方の4人の人物にインタビューした時の様子である。

—【日】小林俊史氏

(NPO法人ゼファー池袋まちづくり 理事長)

最初のインタビュアーは小林俊史氏。元豊島区議会議員で、現在はNPO法人ゼファー池袋まちづくりの理事長、株式会社創発としまの代表取締役を務めている。

小林俊史氏のNPO法人ゼファー池袋まちづく

りは、2004年9月に設立され池袋西口を中心に活動している、地域のまちづくり活動、地域安全の確保等の活動を行い、地区の再生と健全な発展を目指し、活力と魅力ある地域社会の実現を目的に、特定非営利活動法人ゼファー池袋まちづくりを設立。彼の「創発としま」は2011年3月から、都区民50人の発起人により区民活動の積極的展開と協働・創発の区政をすすめることを目的として設立された。業務内容は2ヵ月に一度刊行される地域新聞の発行「とっぴい豊島の選択」や、NPOの「まちづくり」事務局支援などの活動である。「株式会社創発としまというの、自分で経営してます。それからゼファー池袋街づくりですが、地元のメンバーの商店街とか町会、企業とか学校とかを含めた、街づくりのボランティアグループです」。小林俊史氏は、改めて根気よく補足説明してくれた。

池袋の地元団体と華僑団体との交流

池袋の地元団体と華僑団体との交流については「胡さんの会社も同じところにあるんでそれであま仲良くなったんですけど、彼が雑誌に連載をしてくれています。そういうお付き合いがあります」。そのために「胡さんとは僕のいろいろな事業や仕事の関係でお互いにお手伝いしています。そんな感じです」。

また、小林氏は現地の華僑華人団体とのつながりだけでなく、ほかにも広い人脈を有する。「胡さんは池袋国際交流会をやってます。池袋国際グループ、こういう名前の団体代表が胡逸飛さんですので、まあ彼がリーダーだとすれば、彼とはお付き合いはしています。あと豊島区日中友好協会っていうのは、まあ華僑って言うといいのか分からないけど尾崎さんが代表しています。尾崎さんともお付き合いがありますよ」。

日中国体間で展開された活動

中国人と一緒に環境衛生や治安維持活動に参

加しているかどうかについて、小林氏は次のように述べた。「中国人と一緒に治安維持や環境衛生維持の活動があるかですか？これはねありますね。治安維持というよりは環境維持っていうのがあります。これは池袋の駅前のお花整理とか水やり、何回か参加してもらってます。そういうことで活動があります」。中国人のこうした活動への参加の頻度を問われ、小林氏はこう語った。「毎週火曜日のお昼ぐらいにやるんですけど、代わりばんこに担当者を出してくれてるっていうか、仲間の中から順番で来てもらったりしてるみたいです」。

そして、日本の地域社会とよりよい仲間になるために中国側による活動もあるとのこと。「中国人からのイベントがありますよ。ボーリング大会とかダンス大会とかね。僕自身は卓球やったことないけど(笑)、ボーリング大会とかダンス大会も僕じゃないんだけど、仲間と一緒にイベントやったりしてますね。これは南池袋公園でやってます。それから新年賀詞交換会をやったりしてますね。それから、立教大学でなんか講座があったりする時に一緒にスピーカーになったりしています」。

池袋中華街への思い

中国側とは最近、中華街の話をしているが、小林氏は日本側が中華街づくりに参加する必要はないと考えている。「中華街を作ろうというよりも、自分たちの発展を考えて行動してるということでしょうか」。

今の池袋の中華街化には、確かに面白い面があると思っていたけど「東京中華街が取り上げられたときは話したこともあったけど、確かに横浜と比べていいのかどうか分からないけど、横浜は観光の中華料理になっていて、日本人向けの味付けでしかも観光値段みたいな、高い値段になってる。一方、池袋に来たら比較的こう

安くて、地元の人も喜ぶような。ちょっとこのままだと日本人が慣れてないかもしれないけど、中国の人から見れば、本場の感じが残っているような料理がたくさんあって、とても魅力的なんだって。やっぱり僕の趣味と胡氏の趣味がちよっと違ってこれが美味しいんだって勧められたけどなんかあんまりちょっと合わなかった気がする」。

池袋に中華街と一緒に作るというより、多文化共生の場にすべきだと小林氏は考えている。「いろんな人と仲良くしたり、お話を聞く余裕があったりするような街にしていきたいな」と、彼も胡逸飛氏と共通認識を持っている、「中国の人だけじゃなくてね、それからいろんな世界の人も含めてね」と。

今後の「池袋まちづくり」の進路

豊島区の発展のために、小林氏は新たな事業をどんどん広げている。「私はボランティアの仕事をしています。そのほかこういう池袋インバウンド促進のお仕事とか。都市のアートカルチャーっていうのはバス回しですね。観光系のボランティアグループをやっています」。

今のコロナの新しい情勢の下で、「ゼファーっていうのは、企業、住民、外国人、学校とかというような、商店街の組織だけでない人たちが、池袋の街に来て、池袋の街でいろんな活動をされるということを応援していきたいと思ってるんですよ。なので今コロナでいろんなイベントができなかったりしてますけど、オンラインのイベントを今考えたり、準備したりしてる人がいますけど、そういう人たちについて、応援していきたい。それはさっき言ったみたいに、将来世界のいろんな人たちが、ここを舞台に発表して活動できる環境づくりっていうのをどんどん進めていきたいな」と小林氏は最後に述べた。

—【中】孟靖氏（日本国際交流支援協会 代表者）

第2番目の取材対象となった孟靖氏は、小林俊史氏の紹介である。小林氏が創刊した雑誌『とっぴい豊島の選択』（株式会社創発としま発行）にも孟靖氏に関する取材が多い。2人は、20年以上前に池袋で知り合い、駅の清掃などの活動と一緒に参加したりしたとのこと。2021年の11月17日、多忙な彼女にインタビューを受け入れてもらった。

孟氏は1993年に日本に留学してから今まで、すでに日本で28年近く春夏秋冬を歩んできたが、この28年間、勉強、仕事、生活にかかわらず、池袋を離れたことがない。池袋に所在するNPO法人日本華僑華人文化芸術交流協会の理事であり、現在は日本国際交流支援協会の代表者である。団体名を変えたのは、「以前はスポーツをやっていたが、今年はこの名前を変えて教育に転換し始めた」ということだった。孟氏は以前テンセントニュースのインタビューで、「自分の心の中で、池袋を第二の故郷としていた」と話していた人である。今は「Studio-Mを池袋に建てて、永遠に池袋に情を寄せることができることを望んでいる。さらにStudio-Mの創立を通じて、新しい時代の中日文化の交流のために、在日華人の精神生活の豊かさと発展のために、自分の力を役立てることを望んでいます」と。

孟氏は「下町だった池袋がいに一步一步発展してきたかを目の当たりにしてきた。新しい時代の日中交流の『ホットストリート』となり、さまざまな文化を包み込む『劇場都市』となった今の池袋に喜びを感じている」と語り、池袋の未来にも無限の自信を持っているとのこと。「今の豊島区の建設計画を見てみると、文化的な都市になると思う。去年東口から開発を始めて、西口の方も東京芸術劇場のような文化的なものを作っている。池袋を知りたければ、池袋の都市計画の段取りを追っていく必要がある」とも。

池袋中華街構想を支持するが、今は積極的に参加したくない

孟氏は胡氏の組織が発起した毎週2回の『駅前掃除』活動に参加したほか、区に住む中国人家庭と保健所の通訳をしたことがある。参加した『駅前掃除』については「今は胡逸飛氏の団体がいない。今は日本人が組織しているので、たまに行くだけです」と話す。

池袋の将来性を考え、孟氏は中華街構想を支持。「構想は、池袋にさらなる活力とチャンスをもたらす。やれと言われればやりたいけど、面白半分で盛り上げようと言ってきたら、私はやりたくない。しかるべきサポートがあって、具体的な段取りがあって、具体的に誰と話しているのかがわかるチームであればいいけど。最初の建設チームを離れたのはそこがなかったから。それにこの行動はお金がかかる」と。さらに「地域の日本人が見ている一群の池袋作りに励む中国人の姿はあいまいです。実際は各分野の個別の仕事をしなければならぬのに日本人が見たのは一部の偏見を帯びた報道と、中国人が池袋中華街の姿を決めようとしているという誤解だったのかもしれない」と。

池袋の現状の見方

先の「東京中華街構想」の失敗について、孟氏は「これまでの中華街構想は機能していなかったの、政策を見直さなければならない。そもそもこの構想を出したとき、池袋の実態を知らなかった可能性もある」と指摘した。

「今、協会に誰がいるか知らないけど、胡逸飛氏は池袋にいたこともないし、会社もないし、住んだこともないでしょ？それに池袋の歴史も知らないし、池袋というものをつくってくれるプロのチームも会社もないから、むずかしいのよ」。また、「正確な専従者のいない特別企画、文案を、専門性のない者に任せ、具体的な手続きも決まっていなかった。中華街構想は委員会

の専門スタッフに任せたというけど、スタッフが実際は料理店員が休日に仕事の合間にやるという状況で、彼らの日程は忙しく、文案を詰めないまま区役所に連絡したというのが本当のところ。日本語も下手かもしれないし、これをどうやってやっていくのか、この次も難しいと思います」と語った。

池袋の中国人ショップの「野蛮なまでの成長」^(注7)の現状について聞くと、孟氏は「以前、中国人は現状をどう思うかと聞かれたことがある。実は、私たちの中にも良い人はたくさんいますが、個別にはよくありません。今、現地の日本人は中国人にたくさんの店を出されて、たくさんの不動産を中国人に買われて、日本人はただとてもついていけないと感じている。今日日本人に中華街設立を応援させようとしても、彼らは応援しないと思います。これが私のより直接的な考えです」と断言した。

池袋中華街建設に関する意見

孟靖氏は「池袋中華街の建設には力が必要であり、この力は政策に従い、地域社会と調和して統合する必要があります。「野蛮な成長」といっても今までもどんな様子だったか分からない」。まずは、「池袋中華街の建設には、中国人の内部の考えを調整し、具体的な利益を明らかにし、地元の人々の意見を調整できる主催者が必要である」と指摘した。主催者像としては「20歳以上、少なくとも30歳以上。多くの成功した人々がいるでしょう、彼らは鍵になるかもしれません。今日の社会は彼らのアイデア、彼らの宣伝活動、彼らが大切にするビデオ、インターネットから切り離せない。そしていくつかの新しいものの導入を含むSNSでの宣伝は、すべてそれらを必要としています」と語った。

「小林さんも知っているように、池袋は文化的にも進んでいる。彼が作った赤いIKEBUSや南口公園のイベントのように、今の池袋は単な

る料理屋が集まる場所ではなく徐々に事業を転換している。スポーツから教育へのシフトを経て、やっぱり自分は教育に向いていると思い、グループ名を変更しました。今年からの名称ですが、文化交流をしたいと思っていたので、多分こちらの方が教育に向いているようです」と語る。孟氏は続けて、「今後は中国人だけではなく、豊島区在住の外国人、豊島区在住の妊娠・出産前後のママたちとのコラボレーション活動を展開する」と述べた。飽くことのない活発な人物であった。

池袋中華街の展望

最後に、孟靖氏は池袋中華街に大きな期待を示した。「東京中華街は横浜の中華街と同じように発展したとは言えないと思いますが、今のように『wild（規律を欠いたまま）に』成長してはいけません。もっと社会に認められて、日本人に認められて、池袋にいる中国人に誇りを持って、『東京中華街は池袋にある』と言わせたい。横浜の中華街を見ても、みんな昔の華僑だから、何かあったら寄付をしますし、どんな活動をもすごく積極的だけど、池袋では誰に頼めばいいのでしょうか？」と素直に現状に対して疑問を投げた。

——【中】胡逸飛氏（東京中華街促進会理事長）

インタビューを受けてくれた3人目は胡逸飛氏。彼は日本に来て30年になるが、元広告プランナーであり、東京中華街構想の発案者、発起人、東京中華街推進会理事長を務めている。胡逸飛氏はこれまで多くの人のインタビューを受け、グローバル化に興味のある学生で社会学専攻の学生のインタビューに応じたことを話した。「私も知りたい。学生であれ日本人も、中国人も、われわれの時代というものをいったい皆さんはどう見ているのか、是非知りたい」。今回の取材に対しても、彼は私が出した池袋中華街

についての質問表にこだわるべきではないと述べ、中華街の最初の構想や掲げられた中華街のコンセプトについて辛抱強く語ってくれた。

胡逸飛氏が提唱する池袋の東京中華街のコンセプトについて

「人民日報海外版のインタビューで、ずっと前に言ったけど、私たちは世界で初めてのネットワーク型東京中華街だと言いました。そう言えばわかると思います。なぜかという、昔、日本人の女の子が地図を持って池袋に行って、『東京中華街はどこ?』って探したことがあるんだけど、はっきりした基準がないんだよね。ネットワーク型で、ネットワーク的な概念をどう定義すればいいかという、池袋駅を中心にして、だいたい半径500メートルか、円の中を歩いて5、6分くらいの範囲です。第一は経営中の店舗はともかくも、会社にしろ、中華の要素がある。たとえば、あなたが中国人の経営者であることを中華の要素としたとする。中華料理店やサービスの大半は中国の中国人向けであることを一要素としたらどうだろう。そこには政治上の区分はない。中国であれ、日本であれ、大陸であれ、台湾であれ、我々が主宰するこのネットワークに参加することができます」と語る。ネットワーク型という概念については「ネット時代だから、ちょっと空間感覚が追いついていないかな、ネット型の中華街はネット時代に通じるという感じかな」。胡氏は、時代のニーズに対応することに加え、地理的な分布もネットワーク型の中華街が提案されている理由の1つだとし「我々が目指しているのはリアルな中華街ではない。リアルな中華街はできないのではないか。土地がなければ、家がなければどうやって建てるのか実際に不可能です。店舗はドット状に分散していて、それをどう統合するかが私たちの仕事です」。

活発な華人商業圏

料理店という業態以外にも、池袋にはさまざまな業態がある。「中国人が必要とする業態は池袋にもあり、美容院、物産店で旬の上海ガニが買える、国内の大学が池袋に開設している博士課程の学生のための学校、不動産、旅行会社、華字メディア、行政書士、ネットカフェ、カラオケなどの娯楽施設。これらを入れると十一、二種類あります。池袋の華人が必要とするモノやサービスを提供する中で特色が生まれてくる」。中華街構想を提示して13年が経過したが、その間の動きについては「華僑問題の日本の学者（山下清海を指す）、の統計によると、料理店や物産店などだが、彼の統計では約100社。それが今我々が集計したところだとほぼ3倍になり、およそ300社もある。一部の病院（10社）を含め、数社の企業が、それも企業には見えないものがある。それらの経営者の多くは華人が所有している。日中貿易、ITなどで華人の商業圏が活発に動いている」と述べた。

マスコミの報道に対する見方

中華街構想を提案してから多くの反対の声があがったのは、地元の人が池袋中華街のコンセプトを誤解した可能性があることと、当時の池袋では中国人に対するイメージがあまり良くなかったからだと述べた。一方、日本メディアの取材で胡逸飛氏について「チャイニーズドラゴン」とレッテルを張られた問題については「私が彼らの考えと違うのは、『チャイニーズドラゴン』とされている人たちは実は中国人じゃない」というところだと語る。

「毒ギョーザ事件」の報道でも、胡氏は「取材したいという記者がいたが、東京中華街構想を毒入りギョーザと結びつけて宣伝したくなかった。中華街の最大の要素は料理店だから。毒ギョーザと中華街を結びつけると、日本人が食べに来るのか心配だった」。胡氏は最後に記者

のインタビューを受けたが、「私はこう言った、私がインタビューを受けたのは、誤解されることを恐れたためです」と。しかし、新聞に載ると、区役所に多くの抗議の電話がかかってきた。「彼は私からの一節を引用したが、彼の記事全体の構成には問題があった。記事は『中華街vs地元商店会』と書いていて、あたかも中華街と地元の商店が対立しているように報道した。これは私の本意と初志に反していた。私たちは地元の商店会と一緒に地域の発展を促進し、地域の経済の静かな繁栄を促進することを望んでいた」と述べた。

地元社会に溶け込む近年の努力

以下6つの活動を紹介してもらった。順に述べる。

(1) 駅前掃除。最初は胡氏の団体が自発的に清掃活動を組織していたが、地元の清掃組織と対立しているという議論が出てきた。しかし実際は、「地元の組織に加入し、長い間清掃活動に参加していた」と述べた。他にも、

(2) 500円の料理イベント。「知らない日本人に、毎日通っているけど、知らない絶対入ってこないんだよね?このイベントを通じて、私たちがどのように料理を作っているのか、500円使って2、3の料理を学んで、中国人が開いている店がどんな衛生条件なのかを知ってもらう、それが主旨だった」。

(3) 第1回ボーリング大会。2016年には池袋北口の上海料理新天地3階で200人以上のボーリング大会を組織。「当時、この大会には多くの組織が参加し、真っ赤になった」。

(4) 2016年の熊本地震募金活動。「区全体で1,000万円、中国人は200万円を寄付し、被災地の修復のために寄付しました。このイベントの前に中華料理店に募金箱を置いて、寄付金を集めました。当日の公演の日、私たちは中国人の子供達に東口で募金活動をさせました。区役所

が東口にあるので、最後に現場で寄付しました。1人の女の子が作った弁当が60万円を売り上げており、とても意味のあるイベントだと思います」と話した。

(5) 2017年「夢系池袋」シリーズ3話マイクロ映画。「映画の背景は池袋です。私たちが撮影したシーンは池袋で撮ったものです。八十数点に分けて、とても成功しました」。しかし残念ながら、コロナのため、第2弾のマイクロ映画「創業編」は現在放置されている。

(6) コロナの下でのマスク寄付活動。「去年区役所に寄付したマスクは25,000枚。この老人ホームや他の必要な場所に寄付しました。私たちはこれらの活動を通じて、交流を深め、文化やスポーツの活動をしています。ゆっくりと彼らの印象を変えていくことが大切だ」とまとめた。

「以上が私たちの行っている、華人のイメージを改善するための一連の公益活動です。地元の人に、地元の政府を含めて私たちを理解してもらい、私たちを理解してもらうことができます。商業活動も企業活動も信頼関係があればとても簡単になります」。

今の池袋では、中華街構想への反対の声はそれほど多くない。「もちろん、中国人経営者の中には、日本のビジネスを理解していない人もいれば、日本のビジネス習慣に従わない人もいられるかもしれませんが。問題となるのは当然のことですが、日本にいる時間が長くなるにつれて、ゆっくりとですが地元の大切さを理解することはできます。中国の商業文化は日本とは違いますから、結局は時間をかけて理解を深める必要があります」。

中華街に対する反省と未来の試み

「池袋に行けば、中国風のサービスを受けることができます。在日華人の経営者達にとって、池袋に店を開くと、池袋の中国人のためにより

よいサービスをすることができます。そうすれば、良い循環を形成することができます。来たお客さんが多ければ多いほど、市場が広がり、お金を稼ぐ機会生まれます。ここで起業して店を開く人も多くなります」。改革開放後初めて来た華僑として、今の胡氏も「東京中華街促進会」に新鮮な血液を注入している。「私達は平均年齢が50歳なのですが、今では30代の起業家やもっと若い起業家が多く、若者が特に多く、彼らは活発で、考えも活発で、かつ新しいことにチャレンジする勇気を持っています」。

「次に私たちが何をしたいのかですか？ これからすぐに、システムアプリ『ウィーチャット』のミニプログラムとアプリを作ります。飲食店以外の池袋のいろんな業態をみんなに紹介します。うちのアプリはお得アプリといって、ポイントをもらってお得になるようなものにします。このような話は今私達の組織が比較的に緩くつながっているからこそできるわけで、これらをすべて集めて、すべてみんなに対してすべて互恵のものを中心とします」と次の計画を興味深そうに語った。

胡氏は、この2年間のコロナ感染症の下では、これは挑戦であり、チャンスでもあると言う。「華人は相変わらず活躍しています。彼らはそれを困難と見なしていません。むしろチャンスと見なしています」。2022年春にコロナが好転した後、胡氏は「池袋の華人華商同士にサービスを提供する具体的なインタラク션을始め、みんなを1つのプラットフォームに統合する準備を進めています」と話す。中国人にとって魅力的なプラットフォームのように聞こえるが、若者向けのネットワーク型中華街への新たな進展でもある。

胡氏の言葉には『東京中華街』建設への情熱が感じられ、以前の『東京中華街構想』は失敗というより、探求の過程としている。「もちろん、以前もホームページを作ったことがありま

すが、誰も見ていませんでした。単純な紹介をあまりしなかったのが、実際には広告宣伝の効果がありませんでした。そして、中華街をどのように建設するかに集中して宣伝していなかった」と反省を述べた。

今の池袋は、最初の13年前に提案した時よりも規模が拡大している。「私たちが文化交流をして、文芸活動、スポーツ活動を含めて、人の交

流をしてきたのは、とても良い推進作用だと思います。ゆっくりと進めてきましたが今はチャンスだと思います。地元の人々は私たちへの考えを徐々に変えていますよね。私たちも有益な仕事をしなければなりません。これが必要です。ゆっくりと、今はチャンスが来たと思います。タイミングが来ましたね」と胡氏は自信を持って言った。

表 2-1 日中池袋中華街構想についての質問と回答の比較

日 小林俊史氏	YES	中 孟靖氏	YES	中 胡逸飛氏	YES
1. 華僑側と同じ業態の経営者と交流したことがありますか。	✓	1. 日本側と同じ業態の経営者と交流したことがありますか。	✓	1. 日本側と同じ業態の経営者と交流したことがありますか。	✓
2. 定期的に話し合いが行われていますか。	△	2. 定期的に話し合いが行われていますか。	✓	2. 定期的に話し合いが行われていますか。	✓
3. 華僑団体のリーダーの名前を知っていますか。	✓	3. 日本団体のリーダーの名前を知っていますか。	✓ □	3. 日本団体のリーダーの名前を知っていますか。	✓
4. 中国人と一緒に治安維持や環境衛生維持の活動をしていますか。	✓	4. 日本人と一緒に治安維持や環境衛生維持の活動をしていますか。	✓ □	4. 日本人と一緒に治安維持や環境衛生維持の活動をしていますか。	✓
5. 中国人と一緒に他の活動に参加したことがありますか。	✓	5. 日本人と一緒に他の活動に参加したことがありますか。	✓	5. 日本人と一緒に他の活動に参加したことがありますか。	✓
6. 中国人は治安維持や環境衛生のルールに違反し罰金をとられたら、不満がありますか、日本側商工会と交流することはできますか。	✓	6. 中国人は治安維持や環境衛生のルールに違反し罰金をとられたら、不満がありますか、日本側商工会と交流することはできますか。	△	6. 中国人は治安維持や環境衛生のルールに違反し罰金をとられたら、不満がありますか、日本側商工会と交流することはできますか。	△
7. 東京中華街構想を一緒に作りたいですか。	△	7. 東京中華街構想を一緒に作りたいですか。	✓	7. 東京中華街構想を一緒に作りたいですか。	✓
8. 最近東京中華街構想について話したことがありますか。	✓	8. 最近東京中華街構想について話したことがありますか。	×	8. 最近東京中華街構想について話したことがありますか。	✓ □
9. 華僑側からの働きかけがあれば中華街構想を一緒に作っていく、自信がありますか。	×	9. 日本側からの働きかけがあれば中華街構想を一緒に作っていく、自信がありますか。	△	9. 日本側からの働きかけがあれば中華街構想を一緒に作っていく、自信がありますか。	✓
10 東京中華街ができたら、客が増えて利益も増えると思いますか。	△	10 東京中華街ができたら、客が増えて利益も増えると思いますか。	✓	10 東京中華街ができたら、客が増えて利益も増えると思いますか。	✓
11. 池袋の将来設計について話したいことがありますか。		11. 池袋の将来設計について話したいことがありますか。		11. 池袋の将来設計について話したいことがありますか。	

(注) チェックアイコンははい、×部分はいいえ、三角形部分は曖昧または曖昧な部分があり、被取材者は正確な答えを出していない。

回答に食い違いが見られた質問項目

(1) 「2. 定期的に話し合いが行われていますか。」
について

中国側は2人とも定期的に行われているか、定期的な清掃活動などで行われているとみているが、日本側は「街づくりについて定期的な話し合いってというのは、まだそれほどしてない。1年間のうちに、彼らが企画するイベントをどういうふう成功させようかっていうことで相談があったりはしています。私たちのゼファーの交流会とか、まあ新年会とかも含めて交流会みたいなものがありますので、そこに参加してもらおうということで連絡をしたりしています」と小林氏の回答は曖昧であった。

さらに興味深いことに「6. 中国人は治安維持や環境衛生のルールに違反し罰金をとられたら、不満がありますか、日本側商工会と交流することはできますか。」で、小林氏は中国側には交流があるとしているが、「できると思うけど、中国の人達もそれほど日本側商工会とお付き合いを求めているような気もしますね。私たちも自分たちの中でビジネスが完結できているのか、なるべく販路を広く持ちたいっていう気持ちはあると思うけど、それが日本側商工会と一緒にやるっていうふうには考えてない。なんかあんまりそういう要望が出てこないですね。まあ、やり方が分かんないっていうこともあるかもしれない。ただ、日本側商工会っていうか、日本人でもそうだけど、誰もがお付き合いしたら誰もが成功するってわけでもないの、なかなか、そこに至る過程、プロセスが大変だと思っていないんじゃないかなって気もします。時間がかかるんだったら、もっと早く、中国の方って毎回そういう感じがあって、早く結果を出したいとか、もっとスピーディーに売れる方に行きたいっていうのがあるから、1つひとつこうステップを踏んでいってというのは日本人的で。こう日本人っていうか商工会的なゆっくり

としたペースってというのは、あんまり中国人側は好んでないのかなっていう気もしますね。求めているようにも思えました」。一方孟氏は「中国人が治安維持や環境衛生規則に違反したケースはないと理解している」と指摘した。さらに日本側商工会との交流については「私の今の会社と商工会には接点がない。ぶつかり合う接点がない」と孟氏はつけ加えた。胡氏は「コロナ以前は日本にいた時間も多くなく、他の国にも飛び交っていたため、これらの面での接触は多くなかった」と指摘した。もしかすると、これは日中双方が直面している共通の問題かもしれない。

(2) 「9. 日本側からの働きかけがあれば、中華街構想と一緒に作っていく、自信がありますか。」について

日本側的小林氏は、池袋のシンボルが中華街だけであることを望まず、建設には参加したくないと考えている。彼は華僑側の様子を見たいと考えている。孟氏は「区の協力がなければ、池袋の中国人が現地の日本人を説得することは不可能だ。そもそも日本人は中国人に対してマイナスのイメージを持っている」と話す。胡氏はこれには言及していない。

(3) 「10. 東京中華街ができたら、客が増えて利益も増えると思いますか。」について

中国側はいずれも前向きだが、日本側的小林氏は日中双方にとって挑戦であるとし、経過を観察している。「最近、東京中華街構想について話したことがありますか？ については、胡さんこういう話はしています。で、今胡さん達もそんなに東京中華街ってことで売り出そうとは思ってないですね。むしろやっぱり自分たちのネットワークを強くしていこうと思っているというのは、結局そうは言うけど仕事しやすいってこともあるのかな？ 池袋は華僑の人たちがどんどん増えてるんですよ。やっぱり今でも中国の方同士が助け合ってるってこともある

表 2-2 中 3 人【11. 池袋の将来設計について話したいこと】

NPO法人ゼファー池袋まちづくり 理事長 小林俊史氏	日本華僑華人文化芸術交流協会 孟靖氏	東京中華街促進会理事長 胡逸飛氏
<p>「単に池袋を中華街と呼ぶだけでなく、池袋や地元の人にとっては一色すぎる。池袋は1890年半ば以来の若くて新しい街として、多くの国や地域からの人が集まっていて、北海道、広島、九州、沖縄からの人がここに来ていたら、これこそいい池袋です。</p> <p>メディアでは説明されていませんが、実は現在の池袋は特徴のない池袋です。それぞれの地方の人は池袋で付き合っていて、これは彼らにとってすべて故郷です。中華街を建設すれば池袋に「中華」というイメージがつよまり、街建設には不利で面白くない。胡逸飛氏は横浜のような中華街ではなく、ネット上の中華街を建設したいと教えてくれたが、これは魅力的だが、池袋中華街は池袋の魅力的な特徴の1つとしてあることを望んでいます」と小林俊史氏。</p>	<p>かつての池袋は下町で、「混乱地帯」だったと孟靖氏は言った。</p> <p>今の豊島区は文化的な場所になる。昨年池袋駅東口の開発が終わり、西口でも東京芸術劇場を活用した人文系の活動が始まっている。池袋の経営者にもチャンスは広がるだろう。</p> <p>池袋は、今までより若い世代の在日中国人のかかわる新形式の活動が多く、かつての料理店だけではなく、カラオケ店、中華物産店や、新しい教育産業もある。教育産業の指導者、例えば千代田国際語学院の学長がリーダーとなって、池袋中華街の委員会を構成してはどうだろう。彼らのほうが池袋華人代表として、全体を組織しやすいだろう。</p> <p>池袋は今、急速に発展している。「若い中国人にとってここには在日中国人の帰属意識があり、彼らが池袋に来ることは、中国に帰ってきたようなものだ」と語る。</p>	<p>毒ギョーザ報道事件で、中華街構想の大部分を占める中華料理店同士が対立した。「熊本地震での義援金活動からコロナ禍でのマスク寄付に至るまで、私たちは華人のイメージを改善するための公益活動が続けてきた。そうしてこそ、地元の人や地元政府が私たちを理解し、商工会議所や中華街構想を実現しやすくなります」と胡逸飛氏は語る。</p> <p>現在、胡氏のチームは、マイクロフィルムを撮影して、池袋の中国人を宣伝している。2022年春にコロナ禍が少し回復したら、池袋の各業界の経営者らと連携して、さまざまな店舗とクーポンを提供して、池袋に遊びに来た人に便利な携帯アプリを開発する準備を進めている。「池袋の宣伝や中華街構想にも重要な意義がある」と語る。</p>

し。なので、あんまりこういう人が多くなり過ぎちゃって、お互いになんかこう競争しちゃってという感じもあって、結構大変なんだって。例えば200席ぐらいの飲食店ができちゃうと、隣の40席ぐらいのお店が潰れちゃうってこともあるらしい。同じ中国人経営者の中でも張り合っているみたいなことなので、もうちょっとコミュニケーションよく、お互いに発展していいようにすることが中国の方でもできるようにしたい、それはやっぱり日本人も取り組まなきゃいけないんだと思うけど、そういうところに焦点が浮かび上がって来ています」。

——【日】林隆太氏

(横浜中華街華僑4世代 [華のすみか] 監督)

最後の取材対象は、華僑四世代の林隆太氏である。林氏は横浜中華街の華僑を撮影したドキュメンタリー映画「華のすみか」の原作者かつ監督であるが、2021年ついに全国で上映された。池袋に関する質問と質問用紙4-1を送ったところ、林隆太さんは「前半のいくつかの質問には該当しないかと思いましたが、回答できる質問のみ回答します」と回答を寄せてくれた。以下は林隆太氏のインタビューである。

表 2-3 林隆太氏に関する質問と回答

東京中華街ができれば、客が増えて利益も増えると思いますか？	利益は増えると思います。東京中華街という名前には訴求力があるように感じます。しかし、横浜中華街のような日本式の中華街になる必要はないと思います。差別化が必要です。中国のトレンドや文化を大きく反映した業態の方が、国内にいても中国を感じられるという魅力があります。新大久保のコリアンタウンの形式の方が良いように感じます。
池袋の将来設計についてどのようにお考えですか？	池袋が日本における現在進行形の中華文化を発信するプラットフォームになるのは面白いと思います。
池袋の中国人コミュニティは、現在、そして将来、地元の日本人社会と共生していくためにどのような活動をすべきだとお考えですか？	その地域の条例・ルールを守ることが必要です。日本人はどちらかというと神経質で潔癖です。そして、日系企業ともできれば協力関係にある方が、その土地に定着し、日本社会との共生の近道にも繋がると思います。神戸の華僑は古くから日本の実業家・経営者たちとの関係を構築していました。そのようなイメージです。
他の3つのチャイナタウンと比較して、池袋の中国人コミュニティは華人同士および地元との繋がりが緩いですが、私たちの中国人コミュニティは繋がりを深めるために何をすべきだとお考えですか？	日系企業と同様に、中華系の店舗や企業はその土地に馴染むことがとても重要です。その土地の人々にとって必要とされない限りビジネスの繁栄はありません。接客・マナーは日本式である方が受け入れられやすいと感じます。
日本のエスニック社会の進歩とともに、池袋はどのようにすれば日中文化共生を果たし健全な発展を遂げることができるでしょうか？	日本には隣国がないため、エスニック社会化は先進国の中でも遅れていると私は感じています。一般の日本人から外国人に歩み寄ることはなかなか機会がありません。日本で暮らす外国人から日本人コミュニティに歩み寄り、働きかけることが重要だと思います。地域との交流は信頼関係を構築する上でとても大切だと思います。
林さんは子供の頃、メディア報道を通じて中国に対して良い印象を持っていなかったが、米国留学で自分が中国系ハーフとして扱われたことが転機となったと聞きました。その経験を踏まえ、現在、在日中国人に対してどのような印象をお持ちですか？	在日中国人という呼称には違和感を感じます。いちいち「在日」とつけなくて良いと思います。多様性・多文化共生が求められている現代においてわざわざ「在日」という言葉を使い、日本人と分別しなくて良いと感じます。私にとって在日中国人も同じアジア人で仲間ですし、何よりも日本という場所で一緒に生活し生きていこうと切磋琢磨している同居人です。在日中国人の方々にとって日本がより良い生活を得るきっかけになればと願っています。

華人に対するイメージが変わったのは、華人としてのアイデンティティを持ったからだとおっしゃっていますが、日本の主流社会が華人に共感できない状況で、在日華人(池袋)は、そうしたイメージを変えるためにどのような努力をすればいいと思いますか？

横浜中華街の華人の「スミカ」と違って、また神戸や長崎の中華街と違って、池袋は新華人第1世代や第2世代が集まる場所で、彼らのスミカはどこに作ったらいいいのか、彼らはどんなアイデンティティを持てばいいのでしょうか？

やはりマイノリティではあるので、日本人コミュニティと信頼関係を築き上げることが大切です。ただ中国人としてのアイデンティティをねじ伏せる必要はありません。それこそ色々な民族や文化を尊重する社会の形成に反することに繋がると思うからです。ただ押し付け合うのではなく、お互いを尊重し理解しようとするのが大事です。

私のようにアイデンティティは世代が続くと薄れていきますが、それは当たり前のことだと思います。新しい土地・文化・社会に馴染んでいる証拠とも言えます。ちなみに私は愛国心を持ち続けることが一番尊いことだとは思っていません。私にとって本当に大切なことは平穏平和に生きることです。命が一番大事ですし、家族の幸せを望んでいます。今ある生活を少しでも良くするために日本人とか華人とか外国人とか関係なく皆がんばっています。新華僑は個人の利益を追求している人が多いですが、競争社会において、それは自然なことだと思います。しかし、集団としての新華僑の居場所を確保する場合になると、やはり華人同士、また、日本人とも団結することは必要になってくると思います。

個人であろうと集団であろうと、毎日の積み重ねが明るい未来に繋がり、やがてそこにスミカができると思っています。

今後のドキュメンタリー撮影の計画について、林氏は「未来のドキュメンタリーでは池袋の料理屋を撮るかもしれない」と語る。華僑4世代の好奇心から取材に行くとしている。しかし、林氏との会話、林氏以前のインタビュー、そして作品「華のスミカ」から、これも林氏のアイデンティティの一部にすぎないとも言えよう。1つの身分だけを選ばせる必要はない。彼も言うように「つまり国籍とルーツというのが全く同じである必要はなく、国籍はどうあれルーツについてどのように思っているか、どのくらい思い切っているかが大事なのではないでしょうか」。みんながどういう立場に立っているのか、どういう目的を持っているのかではなくて、自

分であろうが、現地の日本人であろうが、日本にいる中国人であろうが、日本にいる他の外国人であろうが、どんなアイデンティティであろうと、日本社会の一員としてつながっていくものを、これから撮りたいと思っているのだろう。

3. 中華街構想プロジェクト

そもそも中華街の原型は、幕府が唐人を一括管理したことでできた。3大伝統中華街は起源、大打撃、再生という3つの発展段階を経て、老華僑華人が最初の創業者、開拓者として、日本人とともに築いた中華街である。一方、池袋中華街は、新華僑華人が自然に集まって形成され

た街であり、新華僑華人は「後来者」であり、なおかつ人の流れは流動的で、中華街の地理的境界も曖昧になっている。これは世界の政治、経済、移民文化の発展とも関係しており、中華街では「生計を立てる」ことを目的とした強制移住から、グローバル化による自由移住へと変化している。日本に來たばかりの中国人は、自然に自分の故郷の情趣を求めて居住地を選択する。渡日後に池袋に集まってきた中国人は、あとで池袋に入ってきた中東人や欧米人と同様に、いわゆる新規移民である^(注8)。このような転入・転出の相次ぐ池袋地区は人の流動性が大きい、「池袋中華街」という言葉もあるが、これは新華僑華人が地元社会と融合していることの表れでもある。融合はダイナミックなプロセス^(注9)（王，2015）であり、この流動性が池袋中華街の地理的境界をますます曖昧にしている理由の1つでもあり、かつ現在の中国人コミュニティの新しい特徴を示すものでもある。中華街は華僑華人に物質的・精神的な満足を提供すると同時に、華僑華人の輪を制限、閉鎖してきた^(注10)。そのため、王（2015，161頁）が指摘するように、有能な華僑華人が中華街を出て行くのは、政治的、経済的により高い発展を求め、地元社会との交流と融合を進め、地元文化との協働から生まれる一種の新生を求めるためであり、より活気のあるものであることは間違いない。

新旧中華街を比較すると、池袋の中華街には三大伝統中華街のような中国の伝統を象徴する牌樓や中国の特色を持つ伝統的な建物、土地、不動産などがあるわけではなく、「ネットワーク型」の概念上の中華街であり、文化コミュニティであることがわかる。池袋には華僑華人が経営する中華料理、娯楽施設、旅行会社、日用品店、不動産など300軒ほどが集まっているが、経営方式は飲食業を中心とした消費エリアであり、横浜などの伝統的な旧中華街との差別化は

明瞭である^(注11)。中華料理以外の本当の売りはどこにあるのか、強みはどこにあるのか、池袋中華街構想の推進過程を振り返って考えてみたい。

これまでの「東京中華街構想」が抱えていたさまざまな問題の根本的な原因は、地元の地域住民や同業者クラブとのコミュニケーション不足にあった。池袋中華街の構築は一朝一夕にできるものではなく、多方面にわたる長期的な努力を着実に実行していくことが求められる。地元社会と資源を共有することと同時に、どのように華僑華人の力を結集してこの街区に対する関心と愛護を増やし、真心を込めて街区建設に貢献するのか。どのように華僑華人側に相応する責任と義務を引き受けさせ「人は他郷にいて、事は他人事」の心の状態から脱して帰属感を高めていくか。「ネットワーク型中華街」の意味を地元の街にどう理解してもらうか。これらは、東京中華街推進会が新華僑華人として直面している現実問題であり、東京中華街の構築に向けてさらに深く考えていくべきところである^(注12)。

初池袋中華街構想の建設が阻止された理由

2007年にはいわゆる「東京中華街」の設立が企画・準備され、2008年1月には「東京中華街推進委員会準備委員会」が設立され、2008年8月1日には「東京中華街を促進する会の設立総会」が開催された。しかし池袋中華街の構築は、さまざまな要因から特に地域社会の理解と支持を得るところとならず、日本の主流社会からはいまだに認められていない。池袋中華街の年表（3-1）を見ても、紆余曲折の道のりがうかがえる。

孟靖氏のインタビューでも明らかなように、この構想は突如打ち出され、地元への根回しや実現までの詳細な実行計画はなかった。孟靖氏は「そんな状況ならもうかわりたくない」としている。本章では、構想を実現するために考えるアプローチを抽出し、その長短の比較を

表 3-1 池袋中華街相關年表

年	池袋相關事件
1991 年	食品スーパー「知音」が开店
2002 年	池袋「陽光城」物産店開業
2005 年	歌舞伎町浄化運動
2007 年秋	初中華街構想が提案された
2007 年 11 月	「東京中華街」準備委員会が発足
2008 年	カラオケ店長暴力事件 中国冷凍ギョーザ中毒事件
2008 年 1 月 25 日	準備委員会は華人メディアを対象とした記者会見を招集した
2008 年 8 月 1 日	「東京中華街」促進会の発足会議
2009 年	振り込め詐欺グループ摘発事件(池袋の犯罪組織が注目された)
2010 年 10 月	当地の右翼団体は「東京中華街」のシンボルである「陽光城」物産店に(JR 池袋駅北口)に襲撃予告があり、警察がこれを阻止する 反対抗議事件が発生した
2011 年	「池袋中国城」出版 「東京中華街」促進会東日本大震災の震災支援活動
2014 年	ウェブサイト「東京中華街」を立ち上げた
2015 年	「東京中華街」促進会 主催新年会(200 人規模)
2015 年 6 月	ネットカフェが海賊版ソフトを使用して摘発

(出所) 山下清海『池袋チャイナタウン：都内最大の中華街の実像に迫る』、第 5 章「東京中華街の波紋」141 頁、より作成。

通して、より現実的な案を提案することとした。

「東京中華街構想」が提案されたとき、日本の地元住民は地方政府に抗議するために街頭デモを行い、華僑店を脅迫した。右翼勢力や他の政治団体は池袋「陽光城」店外で構想に反対した。2008 年のカラオケ店での暴力と毒餃子事件、および 2009 年の犯罪組織の出現は、池袋中華街の建設と開発を妨げることとなった。

池袋華僑華人経営店の現状

池袋には華人の経営する店がたくさんある。中国から輸入した製品を扱う店が多数あるが、ほとんどが独立して運営されており、経営者同士のコミュニケーションや連絡はなく、日本のショッピングモールとのコミュニケーションも不十分で、地域社会からの理解や支援が不足している^(注13)。そのため、上記の反対者以外にも、池袋中華街という考えが地元の日本社会に響き渡るのは難しい状況にある。その理由は次のとおりである。

(1) 構想の主催者と地域住民のコミュニケーションや調整が不十分

日本では、商店街内の店舗は商店街組織への加入が義務付けられているが、池袋では海外の中国の店舗が商店街組合に加入することはほとんどなく、街路灯などの公共施設の電気代も払わない。費用、商店街の清掃などの責任も果していない^(注14)。また、現地の日本人の理解がなければ、海外の中国事業者が池袋で「東京中華街」の看板を一方的に立てるのは適切ではなく、マスコミ報道や世論も沸騰し、大変なトラブルを引き起こしてきた。それに対して、地元の人たちは憤激し、池袋での中華街設立構想に抗議するために街頭デモを行った。

(2) 文化的背景の違いによる生活習慣やビジネスの思考パターンの違い

主催者と地域の商店街の両者の情報に非対称性が生じ、池袋中華街の営業にも支障をきたした。例えば、中国人はビジネスの方法として大声で叫び、それを活気があると思う一方、日本人

はただ単にうるさいととらえる。生活習慣の面では中国人は大声で話し、日本人は静かに話す。正しいか悪いかは別として、生活習慣の違いは、異なる文化的環境下では、近隣に緊張を引き起こす。日本にきたばかりの中国人は、日本語を話せない。地域社会とのコミュニケーションに支障をきたし、地域住民とのコミュニケーションもほとんど取れないため、ゴミ処理の問題でも地域社会とぶつかり、日本人から非難を受ける。「汚い、臭い、悪い」というラベルを張られる。日本の現地社会による海外の中国人および中国人事業者の評価は、彼らがビジネスルールに注意を払っていない、衛生に注意を払っていない、生活習慣が悪い、商店街でのボランティア活動に参加していないというものだ。2つの文化の間には一種の摩擦と対立があり、一部は中国人側が改善する必要がある^(注15)。

池袋の公安と環境問題

池袋は治安が悪いというイメージが定着した。2008年のカラオケ店長への暴力事件、2009年の送金詐欺団による組織犯罪の摘発、そして2015年に高い期待を担って進出したインターネットカフェ「ダーレン」の3人のオペレーターによる海賊版ソフトウェアの使用が発覚した^(注16)。偽物雑貨の専門店という印象を日本人に残し、地元の日本人社会は、池袋は安全でないと考えるまでに至り、池袋の中華街建設に悪影響を及ぼすこととなった。

地域社会との関係

池袋は新たに形成された華僑華人の集結地である。横浜、神戸、長崎のような伝統的な中華街とは異なり、現地の日本人との交流やつながりが広がっているわけではない。戦後、老華僑華人たちは日本で長い間交流し、努力してきた。池袋地区の華僑華人は「後来者」であり、日本社会との交流は今のところあまり進んでいない

ため、日本人との信頼関係はあまり築けていない。また、「東京中華街構想」は、地域住民の理解と支持に加え、豊島区役所の支持も得られていなかった。豊島区は、東京中華街の計画は民間団体による構想であり、関係ないとしている^(注17)。

中華街構想プロジェクト問題分析

池袋の日本人地域社会は華僑華人の政治、経済、社会、生活活動の重要な場であることは認めつつも、「東京中華街構想」を新たな街づくり構想として売り出すことには反対している。一方で横浜、長崎、神戸など、老中華街と現地の日本人社会には歴史的に深いつながりがあり、中華街を文化資源として受け入れている。池袋においては両者に信頼構築機会がないままであった^(注18)。だからこそ、地域社会との調和も、池袋の治安環境も、日中の文化の違いも、結局は東京中華街の建設に地元住民や政府の理解と支持が得られない方向に働くことになった。

交流とは、お互いの違いを認めることから始まり、理解を深め、相互尊重の意識が日常生活の細部にまで浸透することでようやく成立する。日本社会の考え方や見方に影響を与え、変化させていくものでもある。「自ら変わりつつ相手にも変わってもらう」という矛盾をどう解消するかを真剣に考える必要がある。別の角度から見れば、池袋の華僑華人は「池袋中華街構築の流れの中に池袋の日本人社会を引き入れるため努力する」という点を熟慮すれば、他地域の伝統の中華街のように成功に至る鍵を見出すことができよう。伝統的中華街（長崎、神戸、横浜など）が行った、地元の発展に役立つようなコミュニケーションの取り方や、日中双方の納得できるやり方で中華街の建設に乗り出した方法はどのようなものであったのか^(注19)。池袋中華街の構築は難航しているが、新華僑華人は地域社会の理解と支持を得るため、日本現地社会と

表 3-2 池袋中華街構想利害関係者分析

受益者	潜在反対者	実施者	決定者	財政負担者
中、日の経営者	地元の住んでいる人	池袋中華街構想推進協議会（仮称）	豊島区役所	華僑の商社、団体
東京都	地元の経営者	在池袋華僑の商社、団体	東京都庁	池袋商工会（日本側経営者）
観光客	nationalist	池袋商工会（日本側経営者）	経済産業省	東京都庁 経済産業省

表 3-3 池袋中華街構想推進協議会（仮称）詳細利害関係者分析

特徴	ニーズ	可能性	プロジェクトとの関連
まだ存在しない	協議会の結成	町おこしの日中協力のシンボル	定期協議会の開催□
かつて失敗したことがある	日本側と華僑側の協力の実現	同上	同上
日本側商工会は華僑側がメンバーに加わらないことに不満	華僑側による会費の支払い	治安のいい街の維持	会費のルールについて合意する。
日本側商工会は、町の環境保全に華僑側が協力しないことに不満	華僑側の看板の設置や、ゴミ出しルールの遵守	清潔な街の維持	まちの見回りなど共同活動について合意 ゴミ出しのルール順守状況のチェック

図 3-4 池袋中華街構想が実現しないことの結果分析

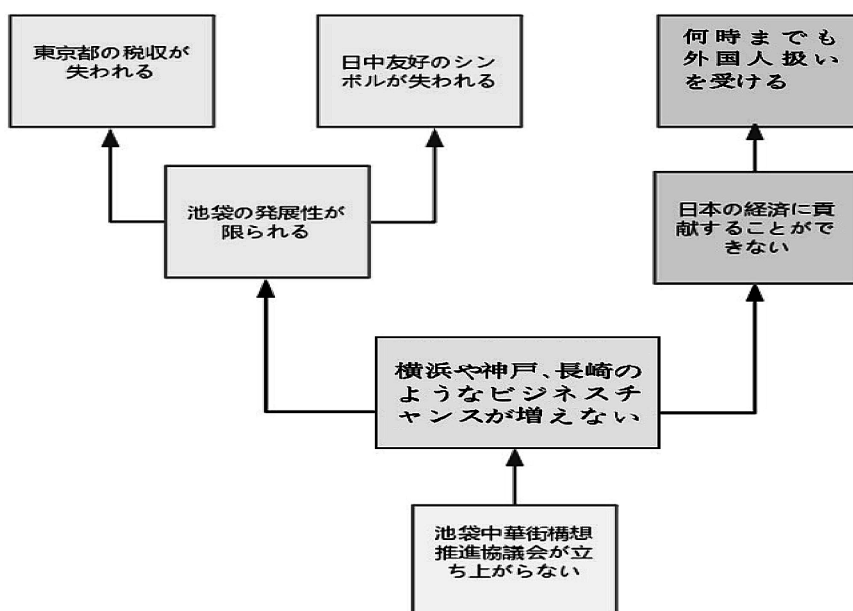
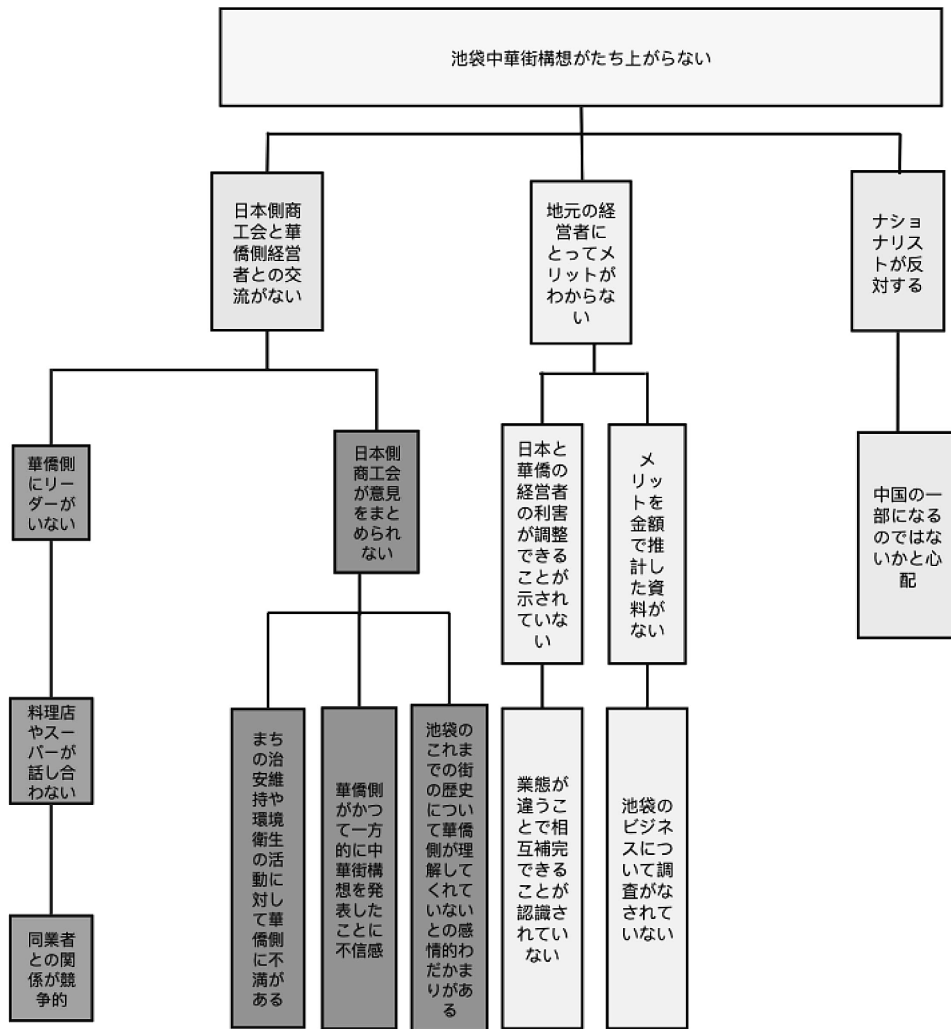


図 3-5 池袋中華街構想が実現しないことの原因分析



の交流と融合のためにどのような地道な努力をすべきなのかを探してみたい。

以下は、池袋中華街構想プロジェクトの利害関係者（表3-2）分析及び協議会の抱える問題の分析（表3-3）及び協議会がないことから来る結果の分析（図3-4）である。

池袋中華街構想プロジェクト

上記の池袋中華街構想プロジェクト問題分析系図（図3-5）からも、池袋中華街構想の中心的課題は、池袋中華街構想推進協議会が地元の商

店会が納得した形で立ち上がることであり、直接の目的は、かつて発起人の胡逸飛氏が述べた「池袋を中心にその周辺にも発展をもたらすこと」に加え、「世界中から集まった中国のビジネスマンの活力を地元に移す日本の経営者の参加を得て、両者が力を合わせてイベントを開催し」、その結果として、横浜、神戸、長崎のチャイナストリートのようにビジネスチャンスを増やす方向に修正し発展させていくことにある。

続いて、この構想が実現したときの効果について検証する。以下は構想実現から得られるブ

図 3-6 池袋中華街構想目的分析

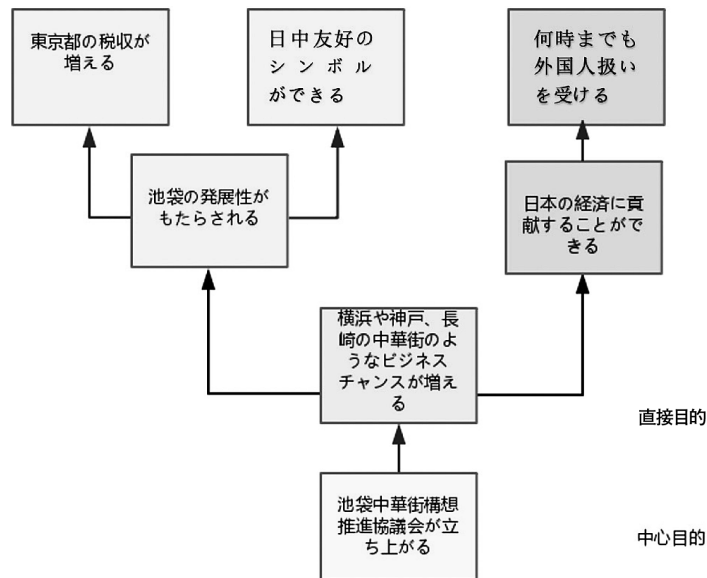
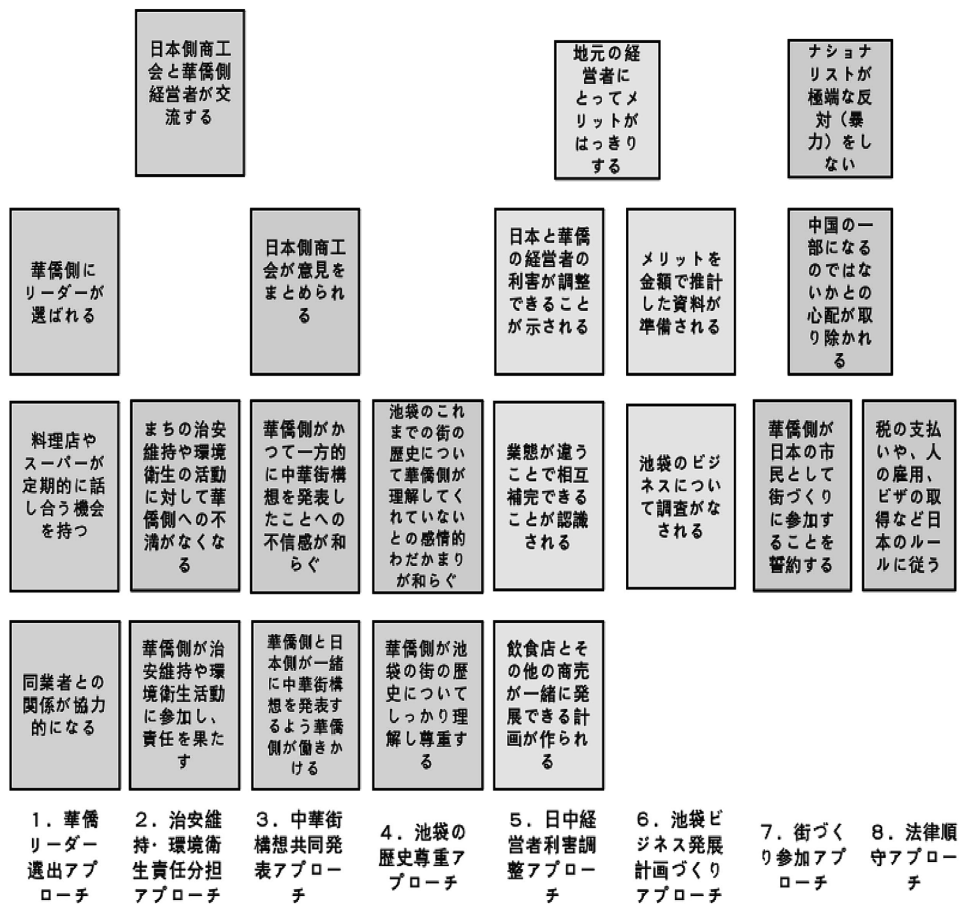


図 3-7 池袋中華街構想アプローチ選択 (注 20)



ラスの効果を図示（図3-6）したものである。

そして、以上の分析から、池袋中華街構想の実現には、以下の8つのアプローチ（図3-7）が必要となると結論付けることができる。

前述の8つのアプローチと最適なアプローチの選択から分かるように、池袋中華街構想プロジェクトには、これを大きく進める貢献できる単一のアプローチがないことがわかる。ここで

はまず協議会結成のため4つのアプローチを組み合わせる、つまり池袋中華街構想という目標の達成には、中華系経営者と日本商工会の協力が必要である。

そして、以上の分析から、池袋中華街構想の実現には、以下の池袋中華街構想PDM（表3-9）を作ることができる。

表 3-8 8つのアプローチ中で最適なアプローチの選択

	1. 華僑側リーダー選出アプローチ	2. 治安維持・環境衛生責任分担アプローチ	3. 中華街構想共同発表アプローチ	4. 池袋の歴史尊重アプローチ	5. 日中経営者利害調整アプローチ	6. 池袋ビジネス発展計画づくりアプローチ	7. 街づくり参加アプローチ	8. 法律順守アプローチ	1、2、3、4、7、8 (華僑側働きかけ)	5、6 (日本側働きかけ)	8. 日中共同作業アプローチ 1、2、3、4、5、6、7、
コスト (金銭)	低い	低い	低い	低い	高い (コンサル タント料)	高い (コンサル タント料)	低い	低い	低い	高い	高い
コスト (時間)	長い	長い	長い	長い	長い	長い	長い	長い	長い	長い	長い
技術的 難しさ	容易	容易	容易	容易	容易	容易	容易	容易	容易	難 (すこし)	難 (すこし)
社会的 反発	小	小	中	小	中	中	小	小	中	中	中

表 3-9 池袋中華街構想プロジェクト・デザイン・マトリクス (PDM)

プロジェクト名:池袋中華街構想プロジェクト. 対象地域:池袋豊島区	期間:2021-2027		作成日:
上位目標	指標	データ入手手段	外部条件
日中双方のビジネスが好転	2027年までに池袋の事業者の収益が2021年の1.5倍になる	豊島区税務署統計	日中友好を尊重する政策が維持される。
豊島区の財政力向上	2027年までに、豊島区の税収が2021年の1.5倍となる	同上	
プロジェクト目標 日中中華街構想推進協議会が立ち上がる	2025年末までに、東京中華街構想に地域の事業者の90%が参加する	日中中華街構想協議会のデータ	中国からの観光客が継続して訪れる。日本人観光客もイベントに集まる。

成果：			
1. 華僑側リーダー選出	1. 2022年末までに華僑側リーダーが選出される。	1. 華僑側商工会	中華街構想協議会の主導権をめぐる争いが起こらない。
2. 治安維持・環境衛生責任分担	2. 2022年末までに日中代表者が参加する商工会が、事業者を指導し、会費の徴収と街の美化活動（看板の適正設置やごみの適正処理）に従う事業者が、全事業者の90%となる。	2. 池袋商工会	
3. 中華街構想共同発表の準備	3. 2024年までに東京中華街構想に反対する事業者が、全事業者の20%まで縮小する。	3. 日本側商工会データ、華僑側商工会データ	
4. 池袋の歴史尊重	4. 2023年末までに、日中双方の経営者の80%が池袋の歴史を第3者に説明することができる。	4. 日本側商工会データ、華僑側商工会データ	
5. 日中経営者利害調整	5. 2023年末までに、日中経営者の得意分野が活かされる街づくり計画が出来上がり、80%の経営者が賛成する。	5. 日本側商工会データ、華僑側商工会データ	
6. 池袋ビジネス発展計画づくり	6. 2024年末までに日中双方の経営者が、新しくできる東京中華街で増える客数をもとに利益の増加について推計ができ、80%の経営者が構想に賛成する。	6. 日本側商工会データ、華僑側商工会データ	
7. 街づくり参加	7. 2024年末までに、日中双方交代で毎月1件のイベントが企画され、年間計画が完成し、運営責任者が任命される。	7. 日本側商工会データ、華僑側商工会データ	
8. 法律順守	8. 2022年末までに、ビザ無しや不法滞在で起訴されるケースがゼロ件になる。	8. 東京入国管理事務所	

活動：		
1.1 華僑の団体結成	5.1 日本側が華僑側に求める項目を洗い出す	・華僑の中でリーダーになりたい人が現れる
1.2 代表者に必要な資格を決める	5.1.1 コンサルタントに調査を依頼する	
1.2.1 華僑を取りまとめる影響力がある	5.1.2 現状と将来像についてデータを確認	
1.2.2 日本の商工会とコミュニケーションできる	5.1.3. ビジネス振興で協調できる項目確認	・街を清潔に保つためのルールが守られる
1.3 リーダー選出の選挙	5.2 華僑側が日本側に求める項目を洗い出す	・中華街構想の発表を巡って日本側が前面に出ることに反対が起こらない
.....	5.2.1 コンサルタントに調査を依頼する	
2.1 治安維持、環境衛生に必要なルールを決める（費用分担、労働提供）		
2.1.1 日本側商工会に華僑にしてほしいことを聞き取りする		

2.1. 2 ルールについて華僑側団体が承認	5.2. 2 現状と将来像についてデータを確認	・池袋の歴史について華僑側が興味を示す
2.2 ルールに沿って行動しているか定期的に確認する	5.2. 3 ビジネス振興で協働できる項目確認	
2.3 ルール違反の人には罰金を徴収する	5.3 両サイドから協働すべき項目を決定	・まちづくりの調査費用について 応分の負担をすることに反対がない
3.1 中華街構想共同発表の資料を準備する	6.1 池袋の将来設計について両者から提案	・ナショナリストが妨害しない
3.1. 1 共同発表の内容について日本側商工会と相談する	6.2 必要な費用について確認	
3.1. 2. 共同発表の内容について華僑団体内で承認を受ける	6.3 得られる利益について確認	前提条件： 池袋中華街構想プロジェクト反対しない
3.1. 3. 共同発表の内容について豊島区役所に提案し合意を得る	6.4 提案を5年計画にまとめる	
3.1. 4 共同発表案を作る	7.1 東京中華街で行うイベントの年間計画立案	
3.1.5 豊島区役所内で記者会見を開いて説明する	7.1. 1 イベントの運営者のシフト合意	
4.1 池袋のこれまでの街の歴史について勉強会を開く	7.1. 2 イベントの準備と実施	
4.1. 1 日本の紹介から講師を招き、戦後の歩みについて講演を依頼する	8.1 華僑側のビザの状況について現状を洗い出す。	
4.1. 2 講演の内容について翻訳し華僑団体内でメンバーに伝達する	8.2 資金の流れについて違法性がないことを確認する	
4.1.3 池袋の歴史の中でイベント時に紹介する中身を決める	8.3 法人税や市民材の支払い状況について洗い出す	
4.2. 1 華僑側で池袋との交流の歴史をまとめる	8.4 ビザ、資金、納税について違法性がないことを確認	
4.2.2 華僑側の池袋の町との交流に歴史を日本語に翻訳し、日本側商工会で共有することを依頼する		
4.3. 1 日本側と華僑側で将来にわたってどう交流するか見出し合意する		

おわりに

東京の池袋中華街と横浜、神戸、長崎という3つの伝統的な中華街はその形成過程が異なっている。それは旧華僑が創立した街ではなく、1980年代から、池袋駅北口の周辺で、新華僑華人が華人の需要にこたえる形で飲食店やレンタルショップなどの商店区域を発展させ、かつ池袋の地元の商業施設と競争する形で発展してきた点が特徴的である。

現在の池袋中華街は、商店街としては地理的に明確な界線を持たずオープンな商業コミュニティである。東京中華街構想が提案されかつ頓挫した十数年を経過した現在これが実現する要件はどこまで整っているのだろうか。分析の結果は、悲観的である。しかし中華街構想が実現するかどうかは別として、日本の多文化共生空間を促進する試みとして、また日本経済の活性化に向けて、多文化共生を実現させることは必須の課題であり、池袋が試金石となることは確かである。今後の池袋のさらなる発展を願い、本論文を閉じることとする。

《注》

- (注1) 山下清海・松村公明・杜国慶「池袋チャイナタウンの形成－日本最初のニューチャイナタウンの事例として」『日本地理学会発表要旨集（2007年春季学術大会）』2007年、69頁。
- (注2) 「日本にある有名“チャイナタウン”を調べてみた！」ビザサブリジャーナルHP、2020年5月29日更新、2022年1月1日閲覧。
<https://kigyosapri.com/visa/note/9713/>
- (注3) 末廣拓登・伊藤 弘「『横浜中華街』の形成過程とその要因に関する研究」、『ランドスケープ研究』第83巻第5号、pp.685-690。
- (注4) 全称は「横浜中華街 街づくり協定 横浜中華街街づくりルールブック（横浜中華街が生き残る為の100年の計）」である。横浜中華街街づくり協定ホームページ、2006年更新、2022年1月1日閲覧。

<https://www.chinatown.or.jp/wpcontent/themes/china2/pdf/chinatownagreement2021.pdf>

- (注5) Bernard P. Wong and Tan Chee-Beng, *Chinatowns Around the World: Gilded Ghetto, Ethnopolis, and Cultural Diaspora*, Leiden, Brill Academic Publishers, 2013, p.250.
- (注6) 鞠玉華（2015）「日中関係や在日華僑華人（2012-2014）（中日关系与在日华侨华人（2012-2014））」『八桂僑刊』（1）：3-9頁、4頁参照。
- (注7) 「野蛮なまでの成長」について：孟靖氏の中国語の文脈記述を翻訳したものであり、短期的な利益の極大化を求め、競合他社と激しく競り合う過当競争状態を指す。結果として短期間にビジネスが急拡大することになる。
- (注8) 廖赤陽編『跨越疆界：留学生与新华侨』北京：社会科学文献出版社、2015年、160頁。
- (注9) 王維「20世紀80年代以来的日本新老“中華街」、廖赤陽編『跨越疆界：留学生与新华侨』北京：社会科学文献出版社、151-185頁、160頁参照。
- (注10) 同上書、161頁。
- (注11) 「昂然と出航する東京中華街に新華僑・新華人の心が集まる」中国新聞網ホームページ、2008年02月18日更新、2021年7月1日閲覧
<https://www.chinanews.com.cn/hr/trj/news/2008/0218/1165796.shtml>
- (注12) 山下清海『池袋チャイナタウン：都内最大の中華街の実像に迫る』洋泉社、2010年、142頁。
- (注13) 「池袋の「東京チャイナタウン」の全景：人々を幸せにし、心配させる」、中国僑報網ホームページ、2018年10月15日更新、2021年7月1日閲覧
<http://www.chinaqw.com/news/200810/23/134893.shtml>
- (注14) 王維「20世紀80年代以来的日本新老“中華街」、廖赤陽編『跨越疆界：留学生与新华侨』北京：社会科学文献出版社、151-185頁、169頁参照。
- (注15) 「東京チャイナタウン建設コンセプトさらに見る」中国僑報網、2008年10月23日更新、2021年12月31日閲覧。
<http://www.chinaqw.com/news/200810/23/134893.shtml>
- (注16) 山下清海『池袋チャイナタウン：都内最大の中華街の実像に迫る』洋泉社、2010年、142頁参照。
- (注17) 王維「20世紀80年代以来的日本新老“中華

街」, 廖赤陽編『跨越疆界：留学生与新华侨』北京：社会科学文献出版社, 151-185 頁, 154 頁参照。

(注 18) 王維『华侨的社会空间与文化符号：日本中华街研究』広州, 中山大学出版社, 2014 年, 271 頁。

(注 19) Bernard P. Wong and Tan Chee-Beng, *Chinatowns Around the World: Gilded Ghetto, Ethnopolis, and Cultural Diaspora*, Leiden, Brill Academic Publishers, 2013, p. 250.

(注 20) アプローチ 1. 2. 3. 4. の最下部が緑色で示しているのは, 中国系ビジネスマンからの日本人地元商工会への働きかけが必要ということを示している。働きかけはまず下から行われそれが上に向かって順次つながる, 手段-目的の連鎖を表している。

【参考文献】

(海外文献)

英語文献

Bernard P. Wong and Tan Chee-Beng, *Chinatowns Around the World: Gilded Ghetto, Ethnopolis, and Cultural Diaspora*, Leiden, Brill Academic Publishers, 2013.

中国語文献

鞠玉華 (2015)「日中関係や在日華僑華人 (2012-2014) (中日关系与在日华侨华人 (2012-2014))」『八桂僑刊』(1): 3-9 頁。

廖赤陽編『跨越疆界：留学生与新华侨』北京：社会科学文献出版社, 2015 年,

王維「20 世紀 80 年代以来の日本新老“中华街」, 廖赤陽編『跨越疆界：留学生与新华侨』北京：社会科学文献出版社, 151-185 頁,

王維『华侨的社会空间与文化符号：日本中华街研究』広州, 中山大学出版社, 2014 年

(邦文献)

末廣拓登・伊藤 弘「「横浜中華街」の形成過程とその要因に関する研究」, 『ランドスケープ研究』第 83 巻第 5 号, pp.685-690.

山下清海『池袋チャイナタウン：都内最大の中華僑街の実像に迫る』洋泉社, 2010 年。

山下清海・松村公明・杜国慶「池袋チャイナタウンの形成——日本最初のニューチャイナタウンの事例として」『日本地理学会発表要旨集 (2007 年春季学術大会)』2007 年,

(インターネット)

ビザサプリジャーナル HP「日本にある有名“チャイナタウン”を調べてみた!」より。

<https://kigyosapri.com/visa/note/9713/> (2022 年 1 月 1 日取得)

横浜中華街街づくり協定 HP「横浜中華街が生き残る為の 100 年の計——横浜中華街街づくりルールブック」より。

<https://www.chinatown.or.jp/wpcontent/themes/china2/pdf/chinatownagreement2021.pdf> (2022 年 1 月 1 日取得)

中国新聞網 HP「昂然と出航する東京中華街に新華僑・新華人の心が集まる」より。

<https://www.chinanews.com.cn/hr/trj/news/2008/0218/1165796.shtml> (2021 年 7 月 1 日取得)

中国僑報網 HP「池袋の「東京チャイナタウン」の全景：人々を幸せにし, 心配させる」より。

2021 年 7 月 1 日閲覧。

<http://www.chinaqw.com/news/200810/23/134893.shtml>.

外国人集住都市会議 HP 外国人居住都市会議公式サイト「概要」より。

2021 年 7 月 1 日閲覧。

<http://www.shujutoshi.jp/gaiyou/index.htm>

中国僑報網 HP「東京チャイナタウン建設コンセプトさらに見る」より。

<http://www.chinaqw.com/news/200810/23/134893.shtml> (2021 年 12 月 31 日取得)

(ふ・けいほ 绍兴中科通信设备有限公司 [ZKTel])